

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 1 日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530936

研究課題名(和文)現象学的教育学における教育的タクト論と教員研修に関する研究

研究課題名(英文)A study on educational tact theory and teacher education in the phenomenological pedagogy

研究代表者

宮原 順寛(MIYAHARA, Norihiro)

北海道教育大学・教育学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：10326481

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)： 教員研修のなかで教育実践の具体的なエピソードを語り合い、その中に含まれている共有可能な実践知を析出するための、フィールドワークと理論研究を行った。ドイツ及びカナダの先行研究の検討に加えて、現象学を基盤として取り組まれているエピソード記述という手法を小中学校等での実践研究に援用するための検討を行った。また、これらの研究成果を、学会における口頭発表や論文発表として公にするとともに、北海道や長崎県の小中学校等における校内研修の事例分析を行い、教育実践現場への知の還元を行った。また、これらの研究についての補足的考察のために、つながりの論理についても考察を行った。

研究成果の概要(英文)： I studied fieldwork and a theory colleagues talked about the concrete episode in the class as the teacher education, and to examine the practical knowledge included in those narratives. Therefore I examined Germany and Canadian phenomenological pedagogic documents. In addition, I examined a method to use the technique called the episode description for the practice study in elementary and junior high schools. This episode description is the study method that is often used in practice of the childcare and its staff education study. It describes its background and meta study as well as an episode. I suggested the training in the school to become a thoughtful teacher. In addition, publicized these results of research as publication of a presentation and the article in the academic meeting, and analyzed an example of the campus training in elementary and junior high schools of Hokkaido and the Nagasaki prefecture, and returned the intellect to the educational practice spot.

研究分野：教育学

キーワード：教育方法学 現象学的教育学 教育的タクト エピソード記述

1. 研究開始当初の背景

本研究は、オランダおよびカナダにおける現象学的教育学の研究者として知られるマックス・ヴァン＝マーネン(Max van Manen, 1942年～)における「教育的タクト(pedagogical tact)」および「教育的思慮深さ(pedagogical thoughtfulness)」といった学術的キーワードを手がかりに、広義の対人援助職として位置づけられる教員の養成や職場内外での学びの在り方への示唆を得ようとするものである。

日本教育方法学会編の『現代教育方法事典』(図書文化、2004年)の中で、白石陽一は、教育的タクトを次のように整理している。「教育的タクト(tact)とは、『理論と実践の媒介項、教育技術の宝』としてヘルバルトによって提起された概念であり、『状況に応じたすばやい判断と決定』を意味する。その語源が子どもとの『接し方』『応答能力』であることから、子どもの表情を読み取る力(感応力)や子どもに対して心身を一体化させて語りかける力(表現力)を意味することもある。」(326頁)ここで言う「教育的タクト」はヘルバルトの大学教授としての就任講義において提起され、その後の彼の教育思想のなかでは道徳的判断力という語に発展的に吸収されていったとされるものである。しかし、ヘルバルト研究者である高久清吉のように、むしろ初期ヘルバルトの「教育的タクト」こそが彼が提起した教育学の基底として、今日においても継承発展するべき概念であるとする者もあり、本研究でもこの立場を継承する。

このJ.F.ヘルバルトの教育的タクトに検討を加えたヤコブ・ムートの著書(“Pädagogischer Takt”, 1962年)などに学びながら、ヴァン＝マーネンは、「子どもに対して責任を持つあらゆる大人は、思慮深さとタクトを持つ必要がある」が、「タクトに上手であることは、直接的なやり方では記述することが出来ない」と言う。しかし、ヴァン＝マーネンは教育的タクトの養成そのものを放棄しているのではなく、「私たちは例や逸話を使って、教育的タクトについて間接的に記述することができる」として、「教育的状況」「教育的瞬間」ないしは「教育的契機」とも訳される)を記述し解釈を重ねることの重要性を指摘している(岡崎美智子・大池美也子・中野和光訳『教育のトーン』(ゆみる出版、2003年、83頁参照)。

このことは、日本における教師教育研究の昨今の動向と相俟って注目されているところの、教育実践におけるエピソードを記述し集団で検討するというカンファレンス型の学びの提起にとっての理論的支柱となるであろう。

なお、ヴァン＝マーネンは、現象学的教育学や教育人間学(特に「子どもの人間学」と呼ばれる)の提唱者とされるオランダのマルテ

イヌス・ヤン・ランゲフェルト(Martinus Jan Langeveld, 1905～1989年)に源流を發する「ユトレヒト学派」の系譜に連なる第2世代と目されている(この点については、村井尚子の新ユトレヒト学派に関する一連の論考を参照のこと)。ランゲフェルトによって提起された現象学的教育学は、1950年代にはドイツの一部の教育学研究者においても受容され、1970年代には日本の京都大学や広島大学等において、ランゲフェルトを招いた連続講演が行われるなど、浸透を見せていた。この研究開始当初頃の教育学界の動向としては、実践と理論との間を「臨床」概念から問い直そうとする和田修二・皇紀夫・矢野智司らによるランゲフェルトに関する考究が行われている。

日本における現象学的な知見を踏まえた授業研究としては、既に中田基昭『授業の現象学 子どもたちから豊かに学ぶ』(東京大学出版会、1993年)ほかいくつかの重要な先行研究が示されている。これらは、いずれもフッサールをはじめとする現象学者の論考から直接に学んでいるという点に特徴がある。そのいっぽうで、これらの研究がドイツの精神科学的教育学の流れを汲むランゲフェルトやヴァン＝マーネンの現象学的教育学の知見をほとんど組み入れることができている点に、本研究が果たすべき学術的な位置が見出される。

そのいっぽうで、授業研究については、1950年代からの北海道大学・東京大学・名古屋大学・神戸大学・広島大学による五大学共同研究を契機として、1960年代には日本教育学会を親学会としながら日本教育方法学会が発足し、その中で授業研究の方法論を含めた教育実践の実証的考究がなされてきた。こちらの系譜においても、吉本均が「臨床の知」「演劇的知」との関わりの中で『教室の人間学』(明治図書出版、1994年)を発表するなど、教育学理論と学校現場等でのフィールドワークとを繋ぐ研究枠組みの提起がなされてきた。

研究代表者自身は、これまでに広島県や長崎県で、上述の流れを汲む授業研究を中心とした学校現場のフィールドワークを数多く経験した。この経験を生かすべく、2010年10月1日付けで現任校である北海道教育大学大学院の独立専攻である学校臨床心理専攻に教育方法学(「学校教育内容方法特論」ほか担当)の専任教員として赴任した。現在では、附属札幌小学校の研究協力者を担当しながら、授業研究の理論研究ならびにフィールドワーク研究を進めている。特に、所属する専攻が、臨床心理学・教育心理学・特別支援教育学・(一般)教育学の4つの分野の連携と知の融合を模索するカリキュラム構成であることも相俟って、現象学的な質的研究法による研究の深化は重要な職責となっている。その際、教育学(教育方法学)の中でも、「子ども理解」を中心的なキーワードと

する臨床教育学的な生活指導論とは密接な関連を持ちながらも、これとは相対的に異なる理論的系譜に位置づく授業研究論を担当していることが本研究テーマへの着想の誘因となっている。

2. 研究の目的

本研究は、「教育的タクト」を鍵概念として、ドイツ・オランダ・カナダ等での現象学的教育学研究ならびにこれに関連して提起されている教員養成および現職教員研修について検討を加えるとともに、日本の教育実践現場（校内研修等）での授業研究を中心とした現職教員研修について、質的研究を軸としながら、その効果的な方途を明らかにしようとするものである。先述した研究の諸背景を踏まえて、現象学的教育学のアプローチを用いて、教育的タクトという概念を中軸に据え、教材研究と子ども理解とをつないだ授業研究を通しての教員研修の方策を提起するための基礎的な蓄積を図ることが本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究においては、設定した3カ年の間に、現象学的教育学や教育的タクト論についての先行研究の成果と課題についての洗い出しを行うとともに、その基盤となる現象学に関する読解と考察を行った。その際、現象学の知見を教育実践および保育実践において展開し、自然科学的な行動観察に代わる質的な研究方法を提唱する鯨岡峻のエピソード記述の研究手法論から多くの示唆を得た。

併せて、長崎県および北海道の小中学校を授業研究による学校改革や教員研修といった視点からフィールドワークすることを通して、現象学的教育学の知見および学教育的タクトと現職研修との接点を見いだした。このことを通して、教育的タクトが発揮される場として特に「学習形態の交互転換」や「発達の最近接領域を適切に考慮した学習課題の設定」などの観点から整理し、小中学校の校内研修等において観点を提起しつつ、後述する研究協力校の協力を得て授業への参与観察を含めた実証的な研究を行った。

具体的な研究協力校は以下の通りである。長崎県佐世保市のA中学校については、この科学研究費補助金による調査開始の2年度前から年に2回程度の頻度で訪問した。その間に校長の異動が1回あった。同じく佐世保市立B中学校については、研究の開始から2年目と3年目に訪問した。この間、校長の異動が1回あった。同じく佐世保市のC中学校とD中学校については、本研究の開始以前から校内研修への参加を許諾してくれていたX校長の異動に伴って訪問先を変えた。また、

かねてより研究協力者となっている研究主任Y教諭の異動に伴って、勤務先の長崎県諫早市のE小学校に科研採択期間中の2年間、および同じく対馬市のF小学校に1年間訪問した。これに関連して、諫早市のG小学校に1回に訪問し、複数の教諭の授業を終日観察し、意見交換の時間をもった。北海道においては、研究採択期間の2年目から札幌市立H小学校に訪問し、特に最終年度には全学年全学級の授業を各1時間以上参観し、校内研修および研究発表大会に計10回以上関わったって参加する機会を得た。また、同じく札幌市のI小学校においては、研究採択期間の2年目から、授業参観および校内研修に各学期1~2回程度の頻度で訪問した。石狩教育管区のJ小学校には、研究採択期間以前から訪問していたが、この間には授業研究と校内研修を年に3~4回訪問参観した。いずれも訪問時には、「指導・助言」または講演という形で、授業のなかの教科内容習得および教師と学習者の間および学習者と学習者の間の相互行為に関する分析を、一部近隣の学校からの研修参加教員を含めた教職員に対して語る場を与えられ、これらをフィールドノートに記録した。

4. 研究成果

本研究では、教員研修のなかで、授業のなかでの具体的なエピソードを語り合い、その中に含まれている共有可能な実践知の析出と検討を行うための、フィールドワークならびに理論研究を行った。より詳細に言えば、ドイツ及びカナダの教育学文献の理論的検討に加えて、現象学を基盤として専ら保育実践とその研究において先行して取り組まれているエピソード記述という手法を小中学校等での実践研究に用いる方法について検討を行った。また、これらの研究成果を、学会における口頭発表や論文の発表として公にした。この研究を補足するために、つながりの論理についても考察を行った。さらに、北海道や長崎県の小中学校等における校内研修の事例分析を行い、教育実践現場への知の還元を行った。

「現象学的教育学におけるエピソード記述による思慮深さの養成」と題する研究発表ならびに研究論文においては、「なぜ他者の実践から教師は学ぶことができるのか」という問題設定のうえに、現象学的な知見を踏まえた教育学思想について整理を行った。この問いを現象学的な命題に置き換えるならば、他者の実践から教師が学ぶことができるという確信はどのように形成されるのか、あるいは、どのような条件下であればそのような教師の学び合いが生まれ得るのか、という問いとなる。この点を明らかにすることによって、実践記録を書き、共同で分析し合うという、広義の対人援助専門職の養成や現職研修に

おける学びの在り方を理論的に基礎づけることができる。これまでに、本研究代表者は、現象学的教育学に関する論考の中でもとりわけカナダのマックス・ヴァン＝マーネンの教育的タクト論を中心に、オランダにおける現象学的教育学の始祖であるマルティヌス・ヤン・ランゲフェルトにも触れながら検討を行ってきた。また、その成果を踏まえて、論文「現象学的教育学における教育的タクト論の展開」(北海道教育大学大学院教育学研究科学校臨床心理専攻研究紀要『学校臨床心理学研究』第9号、2011年、19～31頁所収)を執筆した。今回の研究においては、これを踏まえて、ドイツにおける現象学的教育学の展開について、主としてヘルムート・ダンナー(Helmut Danner, 1941～)に関わる論考を手がかりに検討を加えた。また、その検討の準備作業として、まず、フッサール現象学がその著名さの割に現象学者自身からも誤解を受けてきたことを示し、また、現象学を援用するという研究の多くが、フッサールではなく、ハイデガー、メルロ＝ポンティ、サルトルらに依ることを示した。これらの後に、ダンナーに強い影響を与えたオランダの現象学的教育学の中心人物とみなされるランゲフェルトの現象学理解が、まさにフッサールの論考をその記述の手法のみに限定して換骨奪胎するという主張であったことを整理した。この制限された状況に基盤を置きながらも、ダンナーはフッサールおよびM.メルロ＝ポンティを中心とした現象学、H. G. ガダマーを中心とした解釈学、ならびに弁証法の3つの思考様式を統合した教育学の思考様式を提唱している。ここから、記述し、理解し、変革をもたらす、教育実践の研究方法論が提起されるのである。

「つながりの理論から見た教育実践の分析」と題する研究発表ならびに論文においては、子ども理解を中心とする校内研修の在り方に関する補足的な研究として位置づけた。ソーシャル・ネットワーク理論においては、「6次の隔たり」と「3次の壁」という概念が提唱されている。「6次の隔たり」とは、世界の多くの人びとが「知り合い」のそのまた「知り合い」という形でつながりを計測すれば多くが6次以内に包摂されるという仮説である。実際の実験では、6次には収まらない事例も多いと言うが、世界人口が70億人を超えようとする昨今においては、思った以上に間接的に人がつながり合っているという調査結果は教育学においても考察に値する。つまり、大規模なパッケージ型の講習を大量に実施しなくても、物の見方考え方の人と人とのつながりを介した浸透や影響関係が想定されうるのだ。ただし、ここで「3次の壁」という概念による補足が重要である。「3次の壁」とは、つながりの影響力が、「自分」(0次)の知り合い(1次)の知り合い(2次)の知り合い(3次)までは一定程度に強いとしても、その先の知り合い(4次以降)

に誰が居ても「自分」には影響が及びにくいという主張である。つまり、このことを教育実践に置き換えれば、次のようなことが考えられる。すなわち、子どもの支援のためには、その支援を行う者の3次のつながりの範囲のうち有力な相談助言を行いうる者の存在が必要であるということである。教師自身の納得と影響関係を考慮した学校内外の研修の設定が求められる。

このほか、「演劇的知のパラダイムの再考」や「相互主体パラダイムへの転換の再検討」といったキーワードを含む発表題目の発表において、現象学的な対人関係の規定について考察を行った。特に、教育方法学においては、フッサールの現象学において提起された用語である Intersubjectivitaet(ドイツ語)あるいは intersubjective(英語)を、もっぱら「相互主体性」と訳出している。しかし、先の語は、「間主観性」「共同主観性」「相互主観性」「相互主体性」「間主体性」等、それぞれの論者の力点によっては別の表現での訳出も可能である。教育方法学の議論のなかで相互主体性の訳語が好まれる理由の一つとして、教育方法学が1990年台のパラダイム転換の議論に際して援用したJ.ハーバーマスの社会学理論が、フッサール批判を理論的背景に持つことが挙げられる。教育方法学においては、教師の一方的な伝達教授の在り方でもなく、学習者の自発性に委ねる放任主義でもなく、教師と学習者との間での相互主体性の働きかけ合いへのパラダイム転換が議論された。そのパラダイム転換そのものは現在に続く重要な指摘であったが、そこでの論拠としてのハーバーマスによるフッサール批判の妥当性については、フッサール現象学の再考の機運が高まる今日においては改めての検証が待たれる。この点については、2度の学会発表において検討の機会を持ったが、論文としての発表はこれからの課題として残されている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

宮原順寛、「現象学的教育学におけるエピソード記述による思慮深さの養成」、北海道教育大学大学院教育学研究科学校臨床心理専攻研究紀要『学校臨床心理学研究』第11巻、2014年、43-58頁(査読無し)。

宮原順寛、「つながりの理論から見た教育実践の分析」、中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第58巻、2013年、94-99頁、43-58頁(査読無し)。

〔学会発表〕(計6件)

宮原順寛、「教育方法学における相互主体

パラダイムへの転換の再検討」, 中国四国教育学会第 66 回大会 (自由研究発表・授業研究部会) 2014 年 11 月 15 日、広島大学 (広島県東広島市)。

宮原順寛、「教育実践における専門性の語りと記述と省察」, 北海道臨床教育学会第 4 回大会 (自由研究発表・一般研究部門・第 1 分科会) 2014 年 7 月 13 日、北海道大学 (北海道札幌市)。

宮原順寛、「授業研究における身体性演劇的知のパラダイムの再考」, 日本教育方法学会第 49 回大会 (ラウンドテーブル演劇的知の教育方法学的検討(1)) 2013 年 10 月 6 日、埼玉大学 (埼玉県さいたま市)。

宮原順寛、「現象学的教育学における事例検討による思慮深さの養成」, 北海道臨床教育学会第 3 回大会 (自由研究発表・一般研究部門・第 1 分科会) 2013 年 7 月 14 日、札幌大学 (北海道札幌市)。

宮原順寛、「つながりの理論から見た教育実践の分析」, 中国四国教育学会第 64 回大会 (自由研究発表・生徒指導部会) 2012 年 11 月 10 日、山口大学教育学部 (山口県山口市)。

宮原順寛、「ドイツにおける現象学的教育学の展開 Helmut Danner の論考を手がかりとして」, 日本教育方法学会第 48 回大会 (自由研究 14 部会) 2012 年 10 月 7 日、福井大学文京キャンパス (福井県福井市)。

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

<http://kensoran.hokkyodai.ac.jp/huehp/KgApp?kyoinId=ymdygsgsggy>

(北海道教育大学研究者総覧)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮原順寛 (MIYAHARA, Norihiro)

北海道教育大学大学院・教育学研究科・学校臨床心理専攻・准教授

研究者番号：10326481

(2) 研究分担者

(なし)

(3) 連携研究者

(なし)